

# 着物雑考

林芙美子

青空文庫



あわせ  
袷あわせから単衣ひとえに変わるセルの代用に、私の娘の頃には、ところどころ赤のはいった紺こんがすり 紺こんがすりを着せられたものですが、あれはなかなかいいものだと思います。色の白いひとにも、色の黒いひとにも紺の紺と云うものはなかなかよく似合ったもので、五月頃の青葉になると、早く紺を着せてくれと私はよく母親へせがんだものでした。洗えば洗うほど紺地と白い紺がぱつと鮮かになって、それだけ青葉の季節を感じます。

昔、下谷したやの下宿にいました頃、下宿のお上かみさんが、「あのひとは染そめのいい紺を着ていたからいい家の息子に違いない」なぞと、部屋を見に来る学生のなりふりを見てこう云っておりましたが、

なるほど面白いなと思いました。

一口に紺緋と云つても染のいいのはなかなか高価でしたが、その頃は仕事も現在ののようにラフでないせいか、たいして高価でない緋でも、随分洗いが利いて丈夫だったものです。——私は、どうもセルを好きません。何だか小柄でむくむくしていますせいか、セルを着るかわりに、袷から単衣にすぐ変りますが、いまでもセルがわりに紺緋を着ております。セルでも、昔は柔かい薄地のカシミヤと云うのがありました、あれは着心地がよかつたものです。でも、カシミヤは大変高価だったので、清貧楽愁の私の家では、私に紺緋ばかりを着せてくれました。

男のひとでも、この頃は段々洋服がふえましたせいか、染のい

い緋を着ているひとを見なくなりましたが、日本の青年には紺緋は一つの青春美だとさえ思います。私たち娘の頃、紺緋を着た青年はあこがれの的であつた位です。これ位、また、青年によく似合う着物は他にないのですから、緋屋さんの宣伝をするわけではありませんが、もつと紺緋を着て貰いたいものだと思ひます。洗いざらした紺緋は人間をりりしくみせます。

この頃は人絹じんけんが大変進歩して来て、下手なメリンスをかうより安いと云うのですから、田舎出いなかでの娘さんたちは、猫も杓子しやくしもキンシャマがいで押しているようです。人絹もいいにはいいでしょうが、もつと、どうにかならぬものかと考えます。如何いかにも国粹主義のようですが、もつとシャツキリしたものに眼をつける娘

さんたちが無いのを残念に思います。趣味をもつと優しく内氣にしてほしいと思います。この間、ある百貨店へ木綿をいったん一反買いに参りましたが、木綿のいいのが少しも見当たらないのでガツカリしました。木綿で拾円もするようなのはなくなってしまったのでしよう。呉服部のところを歩いていきますとまるで博覧会へ行つたようなケンランさで、飛びつくような柄がらがすこしもないので、年齢のせいばかりとは云えないほど、色々な呉服ものの染の悪さに、今さら變つたものだと愕おどろいてしまいました。おなじ紅色にしても、昔の紅色は奥行きがあつたように思います。世の中が進歩しているはずなのに、柄模様ときたら、よくもあれだけセツレツに出来たものだと愕くほどでした。——先日も座談会で山脇やまわき

敏子としこさんが話されたように、いまの絹物にはのりの多い地じへゴム印を押ししたような模様が多いのです。立ちどまつてみているひとを見ますと、どこがいいのかしらと思う位です。そんな、デパート選出の柄にみとれている奥さんたちの足袋たびときたら、うす汚れていて、下駄は乱暴なものだったりします。下駄と云えば表つきはきらいです。とくにこの頃のように流行はやる靴の型はどうも好きません。足袋は木綿でコハゼがきつい位なのが私にはあいます。絹の着物の場合はキャラコをはきますが木綿が一番はき心地がよくて好きです。

昔、（よく昔の話を云いますが）ヒフ〔被風〕

と云うものが流行っていました。胸に房をつけて随分いいものだ

ったと思います。あんなのがもう一度娘さんたちの間に流行って  
くれないものでしょうか。メリンスとか銘仙めいせんのようなもので不  
断着だんぎにヒフをつくって着るのは温かでもいいだろうと考えます。私  
はいい着物について語るしかくを持ちませんが、不断着はよそぎ  
よりも、もつと考えてもいいと思います。筒袖つつそでの袖口を花のよ  
うに絞って着せられていた頃もありましたが、洋服の合間には、  
そんなロマンチックな不断の着物もあっていいと思います。

街を歩いていきますと、この頃は初夏だから、みんな薄いシヨ  
ルをして、帯を高く締めて、腰の線まるだしのお尻の辺へ、大き  
なチュウリップの模様なぞつけた女のひとを沢山みますが、私は  
きらいです。利口な女のひとは帯をひくくしめて下さいと云いた



い。娘さんだつて帯はゆつたりとひくく締めている方がたつぷりして美しくみえます。

それから、もうひとつ女の洋装のこと、洋服を注文するひともされるひとも気がついていないのか、どうなのかなと考える事は、娘のからだも年増のとしまの軀もごつちやだと云うことです。

巴里パリから帰りました時、一番おかしかったのは女学生がセーラアのスカートをかかとの辺まで長くして、腰の下ですぼんだ年増のスカートをはいていたことです。女学生はやつぱり大根足のニユウと出た短かいスカートの方が神聖で愛らしくていいと思います。十八、九歳頃までは少女型のあどけないデザインとしまの服をすすめたく思います。それと反対に、いい年増としまが女学生のようなサキ

ユウラの短かいスカートをひらひらしていらしつしやるのをいまでも見かけますが、年増の方は腰の線の出た長い服を召して下さいと云いたいのです。お化粧のことも、娘さんはなるべく清楚せいそにまゆと思ひます。映画の真似なのか、剃そった眉まゆの上に眉を描いて、四本の眉を持った女のひとに時々会いますがぞつとしてしまひます。アイシアドウも、よき家庭の娘はつけません。美容師の方たちにおこられそうだけれど、日本の西洋流の化粧は田舎っぺだと思ひます。(と云つて、お前はどうかと云われたら、私は大田舎っぺだと逃げておきます。ただしその田舎っぺは西洋流でないだけです)

利口な女のひとの何気ない化粧と何気ない趣味の着物にあうと、

しみ透るものを感じます。何も高価なものばかりが高い趣味ではないのですから、もつと、若い女の方たちが個性のある好みを持つてほしいと思います。さてまた、紺の話になりますが、染のいい紺を着るひとが沢山にならないものでしょうか。さつま紺、久留米紺などは勿論もちろんしつかりしたものでしょうが、かえつて、場違いの土地でいい紺をつくっている所を田舎へ旅してみかけることがあります。紺紺の外ほかに好きなのは鹿児島どろぞめの泥染の大島です。洗うほどきれいです。私はかつこうがあまりよくないので手固いものを愛します。——さてそろそろ夏が来ますが、浴衣ゆかたを着られるのはまた何としても愉たのしいことです。何が何だと云つても浴衣の着心地は素敵です。巴里ではどんなにか浴衣が恋しかったもの

でしたが、おそらく、浴衣のように肌ざわりのすすやかな着物は他の国にあまりないでしょう。二、三度水をくぐらせた頃の浴衣はなかなかいいし、柄は単純なのが好きです。

よく、呉服屋では高価な衣裳祭はしても、浴衣祭と云うのをしません。浴衣こそは、ブルジョワもプロレタリアも祝つていいと思います。ただし、不思議に浴衣だけは、「やはり野におけ蓮れん華草んげそう」で、昼間の外出着にならないのが残念です。浴衣に襦じゆば袢んの襟えりを出し、足袋に草履ぞうりをはいたら何ともなさない姿になります。

夏になるとあつぱつぱと云うのが流行りますが一風景です。なかなかいいと思います。一度着てみたいと思います。だが、やつ

ぱり私はみえ坊だから、「層々として山水秀ず、足には遊方の履くつを躡ふみ、手には古藤の枝を執とる」の境地をもとめてりりしい着物を愛します。あっぱっぱも随分りりしくはありますが、そのりりしさよりも、浴衣に襷たすきがけのりりしさを愛します。浴衣の女が手足の爪つめをきちんと剪きっているのはなかなか涼しいものではありませんか。——さてこうして書いてみると、私の趣味も至って平凡ですが身にあつたことが一番でしょう。——高価な衣裳の趣味は、いづれ誰かおかきになるでしょうから……。

私はいったい木綿主義ですが、絹物でも白地を買って自分で色や模様を工夫して染めに出すのが好きです。なかなか愉しみです。女にとって着物の話位何よりもたのしいものは他にありません。

|

# 青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

底本の親本：「林芙美子全集」文泉堂出版

1977（昭和52）年

「林芙美子選集」改造社

1937（昭和12）年

入力：岡本ゆみ子

校正：noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 着物雑考

林芙美子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>